

# 城西病院 DMAT 報告会

## 病院創設から受け継ぐボランティア精神

1月1日に発生した能登半島地震で出動した城西病院 DMAT は3月11日、達生堂グループ職員への報告会を開きました。会場には城西病院のさまざまな部署から約40人が参加し、現地での活動報告を熱心に聴いていました。

今年元旦、午後4時10分ごろに能登半島で震度7の地震が発生。この地震でDMATは2日未明まで待機。5日には茨城県内などのDMATに出動要請があり、城西病院DMATは第3次隊として6日早朝に出発、約14時間かけて被災地の輪島市立輪島病院に到着しました。

報告会では、村田医師から今回の地震の概要やDMATがどのような形で派遣されるのか、現地での活動の概要などについて説明しました。

発災6日目の出動となり、現地では災害の全体像を把握することがまだできず、避難所がどこに何カ所あるのかも分からない状況でした。

昼頃に集合場所となった七尾市の能登総合病院に到着。具体的な活動場所は提示されず、「行きたいと思う所に行ってください」という指示を受け、被災状況が激しく人口も比較的多い輪島市を選んで、地震で損壊した道路を縫うように車3台を進め、4時間近くかけて輪島病院に到着。その日は断水で手を洗う場所もないことから、簡易手洗い所を設けました。

翌7日、近藤看護師、津久井看護師、福嶋看護師の3人は輪島病院の病院支援に入り、村田医師、永井業務調整員、井形業務調整員は輪島市役所の保健医療調整本部に入りました。

看護師3人は、ひっきりなしに訪れる救急外来の支援を行う一方、避難所などで感染症が広がる可能性を考え、発熱外来の立ち上げを行いました。病院支援には、日替わりで多くのDMATチームが支援を行うため、検査や処方箋の取り扱い、医療材料の管理などを統一するための診療マニュアルが必要と痛感し、ホワイトボードにマニュアルを作成しました。輪島病院では元旦勤務の少ないスタッフが不眠不休で診療を行っ



ている状況で、「3人は励まし合いながら活動しました。城西病院スタッフの理解・協力があって活動できました。被災者にどう声をかけていいか悩みました。治療を終えた被災者は自宅に戻るのですが、自宅が地震で住めなくなっている。『仕方ないよ』と避難所に戻るのを見送ったときはつらかった」と報告。そして「多田会長が病院開設時から、戦災の難民キャンプなどでボランティア活動を行ってきた精神がDMATにも根付いています。すべては被災者のためという理念で支援活動を行っていきます」と発表。

永井業務調整員は、村田医師とともに2人の重傷者がいると連絡のあった孤立した避難所に。10人の陸上自衛隊員とともに、雪の積もる中、土砂崩れで車の通れない道を歩いて支援に向かいました。途中、がけ崩れが発生し、危うく巻き込まれそうになったという状況の中で、無事2人を輪島病院まで搬送。井形業務調整員は、調整本部で指揮系統図などの作成や時系列での活動状況の記録などを担当。「普段の活動の延長として、自信を持って取り組むことができました」と話しました。

最後に、阪神淡路大震災をきっかけに創設されたDMAT。「一人でも多くの人を助けたい、災害の現場で役に立ちたいと思っている人は、ぜひ城西病院DMATに入って活動しましょう」とPRしました。

2024年3月12日

©Tasseido group

